

こころの老

不二の巻

(超性徳とは人の天性に超ゆる徳にして天王の恵に因りて善に進むことを謂ふ。)

超性徳最勝		
信		仰
眞	信	愛
眞理の源なるを以て眞實心にあらざれば合はざるなり。	深く之を信じ之を愛樂してまた佛を愛する爲に他人を愛するなり。 萬事に超て愛すとは我生命及所有物を盡く捨る心を以て愛するなり 無限に救ひ玉ふの故なり。	彌陀の願意により現()共に意志を一にし、志操志氣一に唯聖旨にしたがひ聖國の來らんことをのぞみ。

信樂。樂とは愛なり悦なり。又經、歡喜愛樂して無量壽國に生せんと願すれば願に隨て皆生じて不退轉乃至無上正等菩提を得。

一

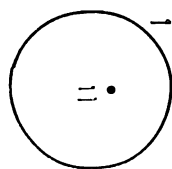
てし竭を心全		
心一ばれす合		
心一 (經小)		心至 (經此)
心三は時く開		
志意	情心	力知
望欲	樂信	實眞
望故相續す	愛樂の故一に決す	信實存の故に淳
願 八 十		
心 三 經 觀		
註 論		

讀誦 諷誦
 經—三部聖典—淨土の依正莊嚴をしりて信を開導するが故に
 律—梵網律—如來正法律をしりて戒となるが故に
 論—往生論—疑を斷じて解信を生せしむが故に

禮拜
 觀察
 稱名
 讚讚供養
 恩寵喚起—五根—信
 恩寵開展—五力—住
 同—七覺支—行
 靈化—八正道—向
 正道—地

三

二



自己の本體を知らんと欲せば自己の根底に向て究めよ。本體は絶對にして一の如し自己は二の如し。自己未生前の大精神は本來の自己即彌陀の法身なり。此未生前の大精神態を宗教にて彌陀の法身と云。

光壽同一
<p>光明とは絶對理性の大精神態にしてすべての過失をのぞきて純粹至精なる精神態、此精神態は自爾に法然として虚徹靈明空間に徧し時間に徹照すべき機能を有せる精神態にしてこの絶對理性の虚徹靈妙なる精神態の時間性には壽命となり空間的には光明と顯はるゝも同體異容のみ。</p>

五

四

神 的 實 在			
未だ開展せざるも遺傳的信仰に	は	なんとなくありがたく感情的不可思議的實在	執意的實在未だ知力として認めざるも執してはざるは實在なり
已に開發したる心理實在			
感覺には清淨實在六根映徹。		感情には歡喜感謝平和靈福の感情。	智力には啓示とし觀念的實在。依正二莊嚴神聖恩寵正義等。
			意志には意志の()

七

光 明			
意(善志)	智慧(眞)	感情(美)	感覺(美)
	のひかりなり。超性の徳智慧超見等なり。	理性と顯はれ大智慧の光り靈明にして衆理を照らすにすべてのまよひを除きやみを去り佛知見開きて佛の眞理に悟入せしむる如きはこ戀慕となり常態には平和安泰寂靜として顯る恩寵に感謝にたえず。	内容形式に光彩榮爛として十方にかゞやく、内容とは或は融液溶解の感情と現はれ、或は無限の愛にうたれ踴躍の情となり。或は渴仰
			此光り感性に映現する時は清淨明徹にして淨摩尼輪の映徹せるが如し。内外に映徹して靈明なり。精神の垢質消滅する時顯現す。金剛石の陽炎に映する如し。主體は磨きたる寶石の如し。客體は太陽の如し。

六

光明	
意志	智力
<p>意志は萬物と</p> <p>太陽の光は明に明輝ならしめて萬物を見せしむ眼のためとせば感性。</p> <p>光熱をあたへて萬物を化育し華とし實として悦ばしむとせば感情</p> <p>光りは唯外面の明が目的にあらずして感性に明をあたへて内の智慧に外觀をよく其理解を得しむる爲とせば智力。</p> <p>光熱は萬物を養ひ花とし實とし樂ましむる爲のみならずこの熱によつて生育するものをして生活せしむる目的とせば意志。</p>	<p>知力の内にあつて外界の事物を理解して其中にあつて右の事物の理に明かなるを知と云。この世間の事理に明なるを世智と云。超世間神の本質事理を明かにするを超世の宗教の智と云。太陽の光にて萬物を見て心によく理解する如し。</p>

光明	
感情	感覺
<p>感情は内にあつて直接に光に接すべきにあらず。感性より傳へられて感情に之を觸るゝとき盲目的に自ら手のまひ足の踏ことをしらざるに至る。譬ば太陽の光熱に浴して春の花ひらくが如し。花は光明なきに聞くにあらず。光熱の爲にひらく。感情もまたしかり。</p>	<p>此光に接せんには感性を清淨にして一切の六塵をしりぞけ、五大皆空にして唯識大のみあつて十方に徧滿すと觀じ極めて心を精練するとき洞然として十方にか々やく。こゝに至つて感覺を澄淨にすれば水すみて太陽の光に映するが如く、清虛一點の雲なきに明月のさやけきが如し。譬へば富嶽に上りて旭に對する如きの精神的感性なり。</p>

九

八

更 生 三 位		
究竟	蘊 色	蘊 心
<p>靈界に入て菩薩の願行成就し彼には果極圓滿を證す。經に後佛道を成する時とは是なり。</p>	<p>報命已に限あり。命終て實在的に彼の無爲の靈界に入る。是を形の更生と名づく。此經に彼土に至れば虛無の身無極の體は之なりと。此の聖徳ありて諸の菩薩のために歎せらるゝとは是なり</p>	<p>宗教的關係信仰の恩寵開展し天然の意象を一轉し彌陀の生命に入る之を更生と云。小乘に云ふ有依涅槃なり。</p> <p>意象は已に彌陀の神靈界の觀念的に安立せるも未だ肉殼の有する間理想的に更生したるなり。</p>

彌 陀 の 證 明	
界 世 念 觀	界 世 覺 感
明 證 の 壽 光	明 證 の 身 法
<p>(後天)</p> <p>法身より我等知情意の性能をうけたるもこの光明の觀念によらざれば開展せず、絶對大智慧觀念の光明の實在するにあらずして我等之を實現をいのも甚だ無益なり。</p> <p>若し此絶對光壽實在せざれば釋尊及びすべての賢聖は何れの理より現れたりや。是絶對神聖の化現にあらずや。</p>	<p>(先天)</p> <p>法身即ち本體なくば何故に日月星宿森然たる萬象は現るゝや。</p> <p>我ら衆生動物にも感性あり。人間には殊に知情意のあるあり。而も一定の天則のあるあり。若し法身この理なくして何に因りて此衆生の心象は現じたるや。</p> <p>衆生の心理は是法身の分身にあらずや。</p>

一一

一〇

往生 成聖五位 天台宗教哲學の六即に相當す。

名字	理即	
人類として宗教的機能具有し此性能は即神の賦與なれば之を開展すべき客體の關係に依て解脱更生すべき理を自ら意識し亦彌陀の光なる意義を學理的に知識す。之を名字即と云。	宇宙間の生類悉く法身本體を根底とせるものなり。理として進化發達して精靈態精神に靈化すべき性能豫備せざるもの有ることなし。理として具有すれども自ら未だ意識せざるを理即とす。	衆生如來藏性即理として具有し之を開き之に知見し悟入し實行の上に分證し究竟に至るまでの宗教意識進化の階級を六位とす。

一一

觀行	相似	分證	究竟
宗教機能具備せるも客體なる至尊の光壽に依らざれば信機開展し靈化すべきものに非らざれば、この關係に於て信機發展し彼の靈光に接し天然を超越して彌陀の靈に更生したるを云ふ。	一たび天然を越へ靈に更生してよりは一ら靈化の意志菩薩の天職として觀念的に還相の回向の職分を竭し畢命爲期彌陀意志實現的に三業に實現し他より彼に對せば自ら佛の如く感ぜらる。遠師導師の如き我祖の如き是なり相似即と云。		

一二

佛 (神靈)	衆生 (顯象)	心 (根底)
法身理性を父とし光明を母とし神靈化の子を生ず 無量光壽 開發靈化の父母	理具十界性具善惡 佛 薩 乘 修 獄 菩 二 天 畜 人 鬼 畜 地	萬物の根底十界依正 是より產生す永恆に 始なく一切を流出す 法身如來性 天然の父 無明を母とし 迷の子を生ず

心佛衆生是三無差別。心とは是萬法の根底、宗教語に云はゞ如來藏性と稱ふべく是一切現象界の根底なりと雖ども直接には衆生心理の根底なり。

一四

佛	衆生	心
萬物能造の法身あり。この生せられたる萬有を攝取して之が心機を開展靈化すべき神尊なかるべからず。之を光壽の神となづく。能く人類の精神を照し高等に開發し靈化し攝取して神靈同化して真理の終局を得せしむるものなり。	衆生とは法身の如來性より産出せられたる理自ら十界の差別の性質あらはる。此差別の心性に應じて身體も國土も隨て感じうる。大體は十界に別つべくも其界に於て又無量の個々の殊持の性をなすが故に即ち無量の界分を成。	如來藏性とは一元理體にして能萬物を生ずる萬法を備へたる理性體なり 佛教に天主とよぶべきものなり。 是を法性身となづく。是天然の父なり。

一五

佛	衆生	心																								
<p>靈化 光明の眞理を父とし個々の理性を母とし四聖の子を生ず 無限光壽 此眞理の光りは終りなくすべてを照し之を攝取し之に合ふものとして攝取し神聖同化して止むことなし</p>	<p>被造 理具十界性能善惡迷悟あり。故に十界依正と現象す。</p> <table border="1" data-bbox="778 481 1020 750"> <tr> <td colspan="2">佛</td> <td colspan="2">菩薩</td> </tr> <tr> <td>界</td> <td>薩</td> <td>緣</td> <td>聞</td> </tr> <tr> <td>羅</td> <td>修</td> <td>人</td> <td>天</td> </tr> <tr> <td>獄</td> <td>地</td> <td>鬼</td> <td>餓</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td>生</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td>畜</td> </tr> </table>	佛		菩薩		界	薩	緣	聞	羅	修	人	天	獄	地	鬼	餓				生				畜	<p>能造 萬物の根底十界依正此より産出す之を所依とし是の天然を父とし無明を母として差別の子を生ず。 法性身 本體は無始に一切萬物を生じ保存して常恒にやむことなし是迷悟の源善惡の根元。</p>
佛		菩薩																								
界	薩	緣	聞																							
羅	修	人	天																							
獄	地	鬼	餓																							
			生																							
			畜																							
照差別界、示一元自性	現象無量差別	本體無差別																								
<p>愛の神。神は光なり。いのちなり。 愛者として亡びたる靈を回復する意を示して一の子をつかはす 已に亡たるものをして無限の光と無限の生命とに復せしむる機能をあらはす</p>	<p>被造物 自性を守らず惡の機能をのみ開展して自己の力にて出づること能はざるに至る</p>	<p>創造の神 是を造るも自ら其靈性を開發すること能はず。自己の性をやしなふ能はず。是天然の父なり。</p>																								
<p>經に心佛衆生是三無差別とは其理體に於ては無差別も其相に於ては各別なり。</p>																										

心	佛
<p>心は萬物の根底是本體を云ふ。一元理なり。是學語なり。宗教語に云はゞ法身又は如來藏性と名づくべし。是萬物の根底なりと雖ども直接に云はゞ衆生心理の根底なり。此法身は一元理にして萬物を生じ萬性を備えたる理性態にしてキリスト教に云はゞ是萬物の父たる天主なり。如來藏性は天然的の父と云べし。</p>	<p>萬物能造の法身あり。被造の萬有あり。被造者は能造に反し差別の自性を執して無差別の本性と違す。是の被造者をして個々の迷執を脱去し眞性を照して被造者に眞價を與へ其眞實の目的を與へ終局神と同性を示さざるべからず。之の神尊を彌陀と號す。即ち限りなきいのち限なき光の義なり衆生個々をして終局同一に歸するのみならず而も開發的に最高等に靈化するの機能を光壽と名づく。</p>
<p>是理由を知識せざるものは救ひを得ざるや。然らず。其學説を了解せざるも只管にすくはるゝものと信じて眞心に祈らば必ずすくはるゝこと疑ふべからず。例へば營養の元理を學理的に解せざるものも食せば營養となり生殖の理に於て生理學を研究せざるものも子を産むべくと同じく、是らは皆本能に賦與せられたる天稟なれば其實功に至つては學説にまつて始めて成功すべきものにあらざる如し。靈の生活に入るも皆同じ理なり。然れども異なる處は身の生活の如く本能には非ず。</p>	

哲學と宗教の同體概念の異		
佛	衆生	心
絕對理性至純至理なる深く思慮を用ひ哲學的靜慮によらざれば之を發見すること能はず。	宇宙の現象界無數の星界及び一切の動植物動物にあつて心象となり人間に於ても頂點に達し賢聖も下愚も此の生の差別とす	本體 哲學にて本體一元理萬物の根底にして不可知のものとする。
是神靈たる彌陀の大知慧光にして普く十方の法界に周徧して神聖の光明なり宗教關係にあらざれば之に契合すること能はず	法界差別の境界六凡の迷界は穢土に現れ四聖の覺界には方便淨土と現れ種々差別顯現す。	眞如藏性は超慮超説の理是生佛の本源にして一切の根底如來藏性と名づく未だ開發せざる絕對如々の法身佛なりとす。

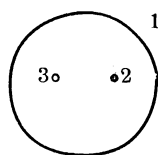
往生

往生とは、往は凡より至聖に趣向する精神過程。生は下層より上層に到るの程度。生は到達するの義にして

往生とは無生の生として精神の本體には本より生滅有ことなきも其意象を轉化する義なり。故に化生とも云。化は轉化の義、凡心を轉じて聖意となり。例へば暗より明きに出づる如く其眼識には異なることなきも明暗大に異なるが如し。

未だ天然としては主我を執し實と認るも一たび彌陀の眞理を明め自己を彌陀の中に歸入しぬる時は、無限の眞我の外更に他の自我有るを認めず、然る時は自ら彌陀の中の我たるを認め彌陀の生命に入る。従前の我にあらず。已に意象轉化したるを往生と云ふ。彌陀の中の生命たるを意識せば生滅あるべき理なし。故に無生の生と名づく。

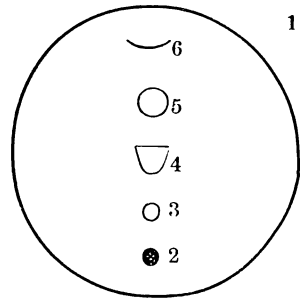
天然の意象は1を我とし往生の後には2を我とし無我の我なり。無限の我なり。
1の眞は無限の眞我。2の我は個々の自我。3は更生の我。1の大我と交徹靈通し自我なく大我の外に我なきを認む。然も未だ有餘の肉殼の中にあり。3は肉殼を脱し實在的に大我に歸し滅度を證し、5は自證を大我と同じて小我の迷を無窮に度す。
こゝに到れば自己より見れば常に大我にして衆生より見れば常恒に無量の小我と現はる。



1は客體の彌陀、2は天然の我、3は更生の我、4は往相の我、5は還相の我、6は小大一體無碍自在。

神人六種の我 宗教意象の六種。

- 1 彌陀の大我。徧空間徧時間絕對の我真我。
- 2 個人の自我。其眞理を悟らず惑が故に我と認む。
- 3 彌陀の光により自我を捐て眞我に入り交徹靈明なるも未だ身殼を脱せず。透明態の腦室を有す。
- 4 有限身殼を脱して實在的に無限の光壽に入る。
- 5 已に無餘大滅度大我に致一するも個人の爲に應現して衆生を度す。
- 6 内に彌陀と致一し内證は常に大我にして衆生より見れば常に不斷に個體。



二四

1は客體、2は天然の我、3は歸命、4は入報土、5は還相、6及1無住涅槃、主客不二。

阿 彌 陀			
無 量 壽		無 量 光	
活動—(動)命	形式—(靜)壽	活動—(動)明	形式—(靜)光
愈々休息することなき作用にして、一切諸佛賢聖の精神作用は悉無量壽の活動せるに外ならず。	絶對眞理の精神態生命にして徧時間永遠に活動して對すれば超時間的形式三世同時の觀念。	絶對眞理的精神態にして超時間常恒永遠寂靜湛然たるに實現して活動せる超精神態なり。十方一切賢聖の精神作用是なり。經に諸佛正徧知入一切衆生心想中。	絶對眞理的精神態にして超空間。寂而常照せる自然的形式的智慧なり。無知の知自然智なり。

二五

玄 義

彌陀の玄義とは、絶對界全宇宙最深の玄義なり。世界觀人生觀の根據たる古來幾多の哲學者の頭腦を煩はしたる玄理にして、此の世界觀の或は器械的に物質の流動力と見、或は唯心の一元理の本質勢力なりと、或は不識精神態なりと。

彌陀教義の玄義も、世界觀人生觀の最終の基礎より研究するに非ざれば、其の玄理を知り、其秘密の蘊奥を究むること能はず。佛教哲學に於ては、古來俱舍の物心二元論、唯識の唯心一元論、天臺の中道的唯心等、其論漸次に發達せり。圭峰の原人論の如きは、甚だ簡なりと雖も原人の進化説の一般を識るに便なり。彼に依れば世界及び人生の最終基礎は、或は大道元氣太極等の支那儒教道教は、天然界を基礎として超天然に宇宙の玄理を究めざるが故に、本より宇宙の本態及び性能を究めたるものに非ず。佛教に入て原始佛教には世界及び人類は衆生の羯磨を本とす。世界は衆生の共同業力の所感、個人は特殊の業力の所感なりと。業力を基礎として其の本質を論せず。體なくして誰が業を有つと。次に進んで法相には藏識を以て根本とす。宇宙は藏識の所現根器界は藏識に依つて現す。藏識が見分を精神とし、相分は物質界とし、自證分は精神の内面とす。藏識は有漏の根底にして、眞如の薰習に依れば、轉じて三身四智等と轉化す。賴耶を根本とす。

空宗には眞性本空、現象界は悉く迷妄なりと。迷盡る時眞性顯示す。宗教の要は唯幻妄を破するにあり、妄滅すれば眞自ら顯はる。眞性消極的。

圓宗には、本覺眞心本自不生不滅不増不減常住不變の佛性を根底とす。本覺の眞心は自性天真、修を假らず、迷亡する時は本覺現前すと。衆生本來成佛、自ら識らざるのみと。此の理を覺悟するとき即ち成佛。初發心時便成正覺所有懸心依他不覺等。

今彌陀宗の玄義は、一佛圓宗の教義にして、客體の本質性能を論するとき、一佛宗の圓教を以て最高圓滿、古來時間的に因果の二位を以て宗教關係を説明せり、今は

二六

二七

横超的宗教、空間的に客體と主體との兩方面に就て研究せん。實を起して論ずれば圓滿なる宗教客體は、時間空間を以て主體と客體との區別をなすも圓滿に其の眞義を説明する能はず。

然れども相對的因果的の世界的方面の人々には、相對的因果的に説明せざれば、其理を説明する能はざるの止を得ざるによりてなり。今は客體と主體との兩方面として客體は能攝所歸彌陀の方に於て、主體は世界的所攝なり。

人道主義天道主義

個人的主我幸福の爲に肉慾我慾のみ發達して人道主義より見れば罪惡なり。

人道主義は人道を標準にして人は萬物の靈にして人の上に出づべき生類あるなく、人類は圓滿なる人類にして動物の極點に達したるものなれば、人類は互に相愛し人類の爲には國家をも犠牲にせざるを得ず。

地相殊なるも風俗習慣殊なりと雖ども人類共通の點ありて倫理の大本に至つては。人道主義は物質に云はゞ地球中心説の如し。

天道中心説は太陽中心説の如し。物質界に於ても地球は太陽との關係を斷ずること能はず。

一二種機類

一、世界依屬(自力)。自とは天然主我的自己、力とは自己の功力をもとす。側ら他力を仰ぐ。全宇宙の最深の玄義を知らず、現象世界因果の規定を中心とし、罪福因果律を信じ絶對眞理の終局目的あるを了せず。故に自己を絶對に依屬しての法然自爾の大道に順せず。

二、絶對依屬(他力)。他とは主我的自己に對す。絶對眞心の彌陀の終局目的に彌陀の智力に依屬して最深の玄理に順するもの。

一實在の目的の中心點は其特質即ち勢力を活動せしむるにあり。人間の特別の資理性を活動せしむるにあり。經濟的機能及び動物的機能を營むは人生の必然的自然的基礎なり。

人間の最大満足は學理的理性及び實踐的理性を活動せしむるにあり。

動物最下等の階級には營養物を吸収し外部の不利益を影響を避んと努るを全生活動とす。色情的生殖機能起り種族を愛する感情の感覺。

遂に高等なる知力社交的生活知力的生活。

個人罪過 生理主義

苦の本。自己機制心理個性の性能。生理機制は幸福主義、個人は絶対の神意の外に出ずして其中に存す。

個人の本質を失はずして神の中に存す。

絶対の一契機たる個人意志活動は如何して絶対意志に戻る。

悪は脱却するが爲に有り。

悪に宗教の必要あり。

悪は脱却の爲に要あり。

脱却すべきを脱却せざるのみならず之を保存維持せんとするは絶対を否定せんとする方面に自己を立つる者にして悪なり。

團體罪過

團體罪過は現時代のみならず之を組織せる制度道德習慣は數時代の連続に依て發達し來る遺傳罪惡あり。個人は惡しき習慣に屈從して之に反抗せず。惡制度を己に利用し惡習を裁可するの一部を働く限りは團體罪過の一部を負担す。

是己を圍繞する瘴氣性大氣を吸ひ、再び瘴氣を呼出して之を大にする也。共同罪過を負は自己天性の性情の外に存せず。惡の感染と團體罪過とは人を外より束縛する惡を組成する事恰も根本惡なる主我と健全並に病態の惡衝動が人の内部の惡を成すに同じ。

團體的遺傳の罪過と個人的遺傳の惡素質とは相合して根本惡なる人の天性を作り人は此規定の下に立て天然人即幸福主義的の個人としては之を脱せんとするも能はず。

天性其自らが惡の根帯なるが故に。

個人の迷と惡の素質開展し、刺激は外部事物並に關係の誘惑のみならず人は常に瘴氣大氣の中に住し他を模し他人の先例によりて自ら辯疏し、漸次惡瘴氣に感染し傳染する危険に入り易し。

自ら迷ふのみならず相互に迷を累ね罪惡を誘惑するの因縁とならざるなし。

惡と社會の賄賂風俗惡習慣等の一般の風潮にはたとへ之に反抗して獨り超然として脱する能はず。道德に反して惡をなすにいたる。

惡風俗惡流行の大氣中に感じておもはずに惡をなすが如きは社會の共罪なり人類を以て中心點として個人は其一員として生活するに()されば國家は中心點に立て國家間には自他の差別あり。自國の利益の爲には他國の人民は異種族の害を障害するも唯自利をなすは眞理に違するに非ざれども、一段進んで人類主義なる即人道見地より判する時は我慾主義にして未人道の罪をまぬかるゝこと能はず。

昭和三年八月廿八日印刷
 同 三十日發行
 誌代年七冊壹圓貳拾錢(郵稅共)
 年拾貳冊 貳圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨 成
 發行人 山崎 辨 成

印刷人 小林 七太郎
 東京市小石川區茗荷谷町九八
 電話小石川一四九五

發行所
 東京市小石川區水道端二ノ四四
 ミオヤのひかり社
 振替東京六八五一番